

矢野暢とおると「東南アジア学」

中西嘉宏

現地の言葉をあやつつたり、現地体験の長さを誇れば一人前として通用した時代は終わつた。もはや現地通の時代ではない（参考文献①、五ページ）。

●はじめに

右の引用は矢野暢（一九三六～一九九）が一九八四年に出版した『東南アジア世界の構図』の一節である。矢野は当時、京都大学東南アジア研究センター（現在は東南アジア研究所）の教授として、地域研究の重要性と新しい学問分野としての「東南アジア学」を提唱していた人物である。

外国を研究するものであれば一度は耳にしたことがあるであろう「もはや現地通の時代ではない」といった言葉は、インターネットの普及とグローバル化で外国の情

報がより簡単に手に入れられる現代を待たずとも、すでに三〇年前から言われていたことがわかる。

だからどうだというわけではない。この手の苦言はだいた誰に向かつて言っているのか特定されないまま発せられ、苦言を聞く研究者のほとんどが「自分は現地通なんかじゃないやい」と思っているから、議論にもならないケースがほとんどだ。このエッセイで考へたいのは、この「現地通の時代」のあとに來るべき時代を巡る矢野の構想についてである。

矢野暢という名前は、少なくとも東南アジア研究者には知られている。矢野は、一九八〇年代から一九九〇年代初頭にかけて、日本の社会科学の世界で、また一般にも、国際政治学者または文化人として活躍していた。一九九〇年代前半までに発表された著作は、

単著、編著を含めて三〇冊を超え、論文や評論は三〇〇本を下らない、多作の学者であった。

しかし、できれば触れたくない名前である。五〇歳代後半という、発言にますます社会的な重みが増す年齢となった一九九三年に、矢野は所属する京都大学を辞職した。その辞め方がずいぶんとまずかった。元秘書などからハラスメントの告発を受け、さらに学内外の批判も受けて辞職に追い込まれたのである。キャンパス・ハラスメントの初期の事例として世間を騒がせた。ついには日本を離れ、ウィーンにある大学で客員として滞在中に亡くなっている。一九九九年のことである。

不祥事で学界を去った人間の学的足跡を振り返るといふ作業は、普通はなされないものだが、「空気を読めない」といふ筆者の

個人的な属性を活かして、短いエッセイを書いてみたい。念の為に断っておくと、氏が犯した罪については断じて許されぬことだと筆者は認識している。

●京大の秀才

冒頭の引用に戻ろう。この引用の宛先は、東南アジアを研究する、あるいはそれを志す人々である。彼／彼女らに、現地通じゃだめだ、と矢野は言い、このあと、以下の文章を続ける。

東南アジア研究が学としての尊厳を求められるようになった現在、東南アジアを対象ないし素材とする「知」の構造が問われてきている。「知」である以上は、それは底知れずきびしい境地に人びとを導いて当然である。「知」の試練に耐えてはじめて、東南アジア研究の学としての尊厳は正当性をもつことになるだろうといえる（参考文献①、六～七ページ）。

「東南アジアの研究」を脱して、ひとつの学問分野として「東南アジア学」を打ち立てようという意気込みを記したこの文章を、

筆者がはじめて読んだのは、たしか学部学生のと看で、なんとも得体的の知れない気迫に圧倒されたのを覚えてる。「『知』の試練に耐えて：」なんてそんなおかげさな、と思つたが、ナイーブな大学生に精神論は受けるもので、そういうものなのか、とも思つた。

もちろん、当時、東南アジア研究センターの教授として東南アジア研究の意義を学内、学外に売り出してた矢野が、まだ歴史の浅い研究分野をアピールするために出した戦略的なメッセージという側面もあるう。しかし、おそらく戦略だけではない。矢野のそれまでの仕事をみると、自身の研究の方向性が「東南アジア学」という構想に向かつていく過程がわかる。

矢野の研究者としてのデビューは一九六一年のことである。この年、タイの立憲主義革命について論じた「タイ国政治近代化の一局面——一九三二年立憲クーデターを中心に」（参考文献②）を、京都大学法学部の紀要である『法学論叢』に掲載している（元は法学研究科に提出した修士論文）。また、同じ年、「東南アジアにおける共産主義」というタイトルで、タイ、インドネシア、ビルマの共

産党を比較した論文を日本国際政治学会の『国際政治』に掲載している。

両論文は、当時、アメリカを中心に流行していた近代化論の影響を多分に受けており、例えば「タイ国政治：」は、近代化のプロセスのなかでエリートが循環するというH. D. Lasswellらのエリート

研究の成果を援用しながらタイの立憲革命をあとづけたものである。両論文ともに、当時はまだまだ理解が浅かった東南アジアの政治過程を分析した論考として異彩を放っていたであろう。とはいっても、誤解を恐れずに言えば、アメリカの途上国政治研究の潮流に敏感な秀才の手による論文という印象が強い。

矢野がそもそも東南アジアの政治に関心を持つようになったのは、学部の三年時にあたる一九五七年から指導を受けていた京都大学法学部教授で国際政治学者の猪木正道の影響である。当時の猪木の関心は東南アジアに対するアメリカ政府の介入であり、また、同地域の共産化傾向であった。

猪木は東南アジア研究センターの前身である東南アジア研究会というグループが学内で発足した際

にメンバーとして参加し、自身の学生である矢野もそこに加えている。矢野は数少ない大学院生メンバーとして研究会で報告し、さらにその報告内容を発展させて、一九六三年六月に創刊された学術雑誌『東南アジア研究』の創刊号に「タイ国政治の連続性と不連続性」という論文を載せている。

●フィールドワーク

研究者および知識人として生涯のロールモデルであった猪木に導かれて足を踏み入れた東南アジア研究で、当初はオーソドックスな政治研究をしていた矢野だが、一九六四年五月から一九六六年三月まで調査のために滞在した南タイ・ソクラー県のドーン・キレクというムスリム村落での経験が研究遍歴の大きな転換点となる。

このフィールドワークの成果はのちに一九六七年から一九七四年にかけて断続的に『東南アジア研究』上で発表された。例えば、一九六七年に発表された「南タイの土地所有」は、本人が言うところの「社会人類学的村落調査」によつて土地所有と相続の実態を検討したもので、結論ではタイの土地法の問題点と今後の相続で土地

が細分化していく可能性が高い点が指摘されている。これらは、それまでの論文とはまったく違う、人類学的、農村経済学的な考察を試みた極めて挑戦的な内容だった。京都大学の東南アジア研究が目指した学際的、文理融合的な研究路線に沿ったものでもあった。

こうした村落でのフィールドワークの経験が一般的な社会科学者とは一線を画す研究者であることを矢野に自認させることになり、その研究内容も変化させる。

例えば、矢野のちに「東南アジア世界をまるはだかにする理論的な試み」（参考文献③、五ページ）として提唱した「小型家産制国家」概念は、ドーン・キレクのフィールドワークの経験を通じて生まれたものだという。小型家産制国家の定義は、「河川の支配を権力の基盤とし、領域支配の観念と実践に乏しく、分節的でルー sns 社会の上に成立する、ヒンズーの王権思想に拠る小規模な家産制の権力のこと」である（参考文献③、七ページ）。こうした国家が一九八〇年時点であったわけではないが、一九世紀中頃までは多くの地域で残っており、それが現代の政治のあり方にも影を落と

しているというのが矢野の主張だった。この概念の起源に関する本人の言葉を引用しておこう。

村のまんなかにある茶店で、いつものように野良仕事をおえた村民たちと喋っているときに、たまたまバンコクとはなにかというはなしになり、彼らが首都のバンコクのことを「外国」だといったのがヒントになっっている（参考文献③、五一ページ）。

やや出来過ぎなようにも思えるが、タイ農村で暮らした経験が矢野に、法学研究科の秀才、あるいは猪木門下生の国際政治学者とは異なる自己意識を与えたことは間違いない。

●個人化と倫理化

興味深いことに、このフィールドでの体験と新しい研究アプローチの模索は、その後、やや極端なかたちで発展していく。一九九三年に発表された「〈関係の政治学〉と〈無関係の政治学〉」のなかで、南タイ農村滞在後の自身の政治学との関係を振り返って矢野は次のように記している。

従来学んできた政治学的手法だけで東南アジアの政治を分析することに、大きな限界を感じはじめた。要するに、ヨーロッパや日本と、なにもかもがちがうのである。王権も、政府も、官僚制も、国家のものも、そして「政治」の意味論も、すべて欧米の政治の常識では解けない局面を帯び過ぎていて、たとえば、タイのある政治現象を常識的な政治学的手法を用いて分析して、それを日本語で論文にまとめるという作業

がどれほど空しいことであるのかを、研究が進めば進むほど痛く感じるようになった（参考文献④、二〇四ページ）。

この空しさはますます強まり、「いわゆる『政治学者』というアイデンティティをしないで放棄していくことになった」（参考文献④、二〇五ページ）という。そしてさらに向かった先が「個人化した政治学」と〈東南アジア学〉であった。

「個人化した政治学」は「自分だけの方法論、つまり自分の人生体験を踏まえ、自分なりの知性主

義の枠組みと世界観とを折り合わせながら、独自の語法と理論体系で組み立てる、いわば主体的エピソードとしての政治学」（参考文献④、二〇五ページ）であり、そうした方法にもとづいて書かれたのが『東南アジア世界の論理』（参考文献③）であった。前述した小型家産的国家概念はその中核的な主張だ。ただし、ここでいう個人化はすべてを独自の理論で説明するものではなく、「家産的国家」という言葉が示すように、

マックス・ウェーバーの枠組みから矢野は重要なヒントを得ている。後者の〈東南アジア学〉構想については、書かれたものを読んでも全体像を把握するのがなかなか難しいが、東南アジアという地域の存在を疑いながらも、それが他地域とは異なる特質を持つ空間として論じる試みだと大雑把にはいえるだろう。

東南アジアという地域概念が政治的単位としてつくられたのは、太平洋戦争中だった一九四三年にイギリスが東南アジア軍司令部をセイロン（現在のスリランカ）に設置した時点である。ただ、セイロンに司令部が置かれたことから

もわかるように、その地域名が当時想定した国々は今の東南アジア諸国と同じではなかった。東南アジアという言葉が地域名として安定するには時間が必要だった。

こうした地域概念の不安定さは東南アジア研究の分析単位にあまり根拠がないことを意味する。それを受けて矢野は、東南アジアを東南アジアたらしめる存在を問うことが同地域を研究するものの義務だという見解を示した。自身の研究対象の自明性を疑う作業は研究者にとっては欠かせないものだが、矢野の提言はそれを学問上の義務として東南アジア研究者に課そうとするものだった。たとえば、次の記述がその典型例だ。

〈東南アジア学〉は、たんなる東南アジア研究ではなく、その正当性を吟味し、それに正しい方向づけを与えるきびしい倫理性をともなった立場である（参考文献①、五ページ）。

ここで、なぜ東南アジア研究者だけが「きびしい倫理性をともなった立場」に身を置かねばならないのかについて、残念ながら説明はなく、読んでみると、一方的にお説教を受けている気分になる。

を正当に受け継ぐものはいない。

●結論にかえて

「個人化された政治学」や、倫理的な〈東南アジア学〉の提唱は、ひとつには、かつて、六〇年代頭まで東南アジア研究が「東洋史の周縁」だったときに比べて、約二〇年を経て研究の裾野が広がったことを示す一里塚であり、もうひとつには、さらなる研究分野の発展を望む、東南アジア研究センター所長・矢野教授の力みでもあつたように思う。

とはいえ、ヨーロッパや日本と東南アジアの違いを意識したとしても、方法論を個人的な技芸にまで帰してしまうのは、研究分野全体の長期的な成果の蓄積を難しくする。また、研究姿勢を倫理的な義務のようにみなすのは、研究者の自由な活動に無用な負荷をかけるしまうだろう。

現在からみると、やや力みすぎているような印象を与えるその言動は、個人的な性格や経歴によるのか、欧米とも比肩できる経済力を得た当時の日本社会の自信が反映されたものか、あるいは、京都大学という知的現場の力学によるものか、はたまた教養主義と人格主義という文化的な伝統によるのか。そこはわからないが、その後、矢野の〈東南アジア学〉構想

の世論からきびしく問い込まれている状況で、純粹アカデミズムにこだわり続けようとする一部の研究者の姿勢に、極楽トンボ的な道義的怠慢も感じて」（参考文献④、二一四ページ）執筆にとりかかったという。そして事件直後から論文を『中央公論』に発表し、翌年に『南進』の系譜』を発表した。

現地での偶然的な経験が研究の強いモチベーションになることはよくあることだし、外国の研究を進めるうえでは大切なことだ。この大切さを訴えるのに、一部の研究者の「道義的怠慢」を持ち出すのが矢野らしいが、「かかわりのエトス」のメッセージ自体は重要だ

と思う。我々の問題意識や立場は常に社会（矢野の場合は日本）によつてつくりられ、その軛から逃れることはできない。そうした限界に言及しないことで客観的であろうとするより、むしろ我々の置かれた立場からみて大事なことは何かを意識して時代に応じた問いを立てること。グローバル化が進み、日本と外国との関係がますます盛んになるなかでこうした意識はますます有意義になるだろう。

現在の日本と東南アジア、その他の地域との関わり、そして社会

の世論からきびしく問い込まれている状況で、純粹アカデミズムにこだわり続けようとする一部の研究者の姿勢に、極楽トンボ的な道義的怠慢も感じて」（参考文献④、二一四ページ）執筆にとりかかったという。そして事件直後から論文を『中央公論』に発表し、翌年に『南進』の系譜』を発表した。

現地での偶然的な経験が研究の強いモチベーションになることはよくあることだし、外国の研究を進めるうえでは大切なことだ。この大切さを訴えるのに、一部の研究者の「道義的怠慢」を持ち出すのが矢野らしいが、「かかわりのエトス」のメッセージ自体は重要だ

と思う。我々の問題意識や立場は常に社会（矢野の場合は日本）によつてつくりられ、その軛から逃れることはできない。そうした限界に言及しないことで客観的であろうとするより、むしろ我々の置かれた立場からみて大事なことは何かを意識して時代に応じた問いを立てること。グローバル化が進み、日本と外国との関係がますます盛んになるなかでこうした意識はますます有意義になるだろう。

現在の日本と東南アジア、その他の地域との関わり、そして社会

的な要請に研究者はどう応えていけばいいのか、この点について矢野の軌跡から示唆を得ることはできると思う。

（なかにし よしひろ／京都大学東南アジア研究所・准教授）

《参考文献》

- ① 矢野暢「一九八四」『東南アジア世界の構図―政治的生態史観の立場から』NHKブックス。
- ② 「一九六一」『タイ国政治近代化の局面―一九三二年立憲クーデターを中心に』『法学論叢』第七〇巻三号。
- ③ 「一九八〇」『東南アジア世界の論理』中央公論社。
- ④ 「一九九三」『関係』の政治学と〈無関係〉の政治学』『講座現代の地域研究③ 地域研究のフロンティア』弘文堂。
- ⑤ 「一九七五」『南進』の系譜』中央公論社。
- ⑥ 「一九七九」『日本の南洋史観』中央公論社。